

## いろいろな個性が生きる環境

### ～ A君の支援から見てきたもの ～

東京都スクールカウンセラー（臨床心理士） 金屋光彦

「この学校で一番うれしかったことは、みんながとても親切にしてくれたことです……」

平成22年3月の卒業式、体育館の壇上から、級友や在校生、保護者や先生方の前でそう言ったA君の声が、屋内体育館のすみずみまでかろやかに響いた。卒業証書を手にした彼の晴れやかな表情には、教室に入れずに隣の空き教室で落ち着きなくさまよっていた2年前の彼の姿は、もうどこにもなかった。

「どうせ悪口を言われるだけだ」とあれほど嫌っていたクラスへの思いが、「みんながとても親切にしてくれた」という肯定的な認知へと変容できたのである。

週1回は別の学校にある通級指導教室へ通っていた彼には、特別支援が日常的に必要なレベル、対人関係はじめ学校生活上の困難を生得的に抱えていた側面があった。通級指導教室の先生は「通常学級でみる児童ではなく、特別支援学級で面倒をみるのが適当である」という見解だった。そのことを告げられた保護者が心を痛み、担任教諭と連携しながら、SCは保護者カウンセリングを継続して行った。

A君が不登校を克服し教室へ普通に通えるようになり、望ましい認知へと変容できたのは、担任の先生の辛抱強い適切な対応をはじめ、この学校が持つ文化風土の力も大きかった。それは、「いろんな子がいていいんだ」という文化である。一人ひとりの児童に、学校スタッフ全員が目をかけ手をかける手作り文化といってよい。

この学校の学区内には、大きな児童養護施設がある。そこから通う子供たちも多く、彼らは一様に個性豊かである。幼い頃から苦労しているせいか、他者の悲しみや苦しみに共感でき、人への思いやりが人一倍育っている子どもたちも少なくない。このいろいろな個性が混在するという環境は、実は今後の社会を考えると、教育上極めて重要な環境要因であるといえる。

なぜなら、子どもたちが、将来学校生活を終えて職業生活へ入っていく頃には、ますます国際化が進んでいるからである。韓国や中国、フィリピンはじめ、アジアの国々の

人たち、ヨーロッパやオセアニア、それに未来の大国と言われるブラジルやロシアの人たち等、民族や国籍が違い、風習も考え方も違う人々と、一緒に働いたり暮らしたりする日々が、当たり前の日常になっていくだろう。そういった多彩な世界の人々と働く人生、大人の生活が将来待っているのであれば、小学生の時からいろいろなタイプの仲間と接するのは、極めて大事な体験となる。

さいたま市も、平成17年から「人間関係プログラム」を、市内の全小中学校で導入した。これは、児童生徒とのコミュニケーション能力の育成をベースに、英会話をセットにして行い、将来の豊かな国際人を育てるのが目的である。企業もさまざまな個性を人材として求めている。企業が学生に求める資質の第1位は、毎年決まって「コミュニケーション能力」である。

そういう観点からも、さまざまな個性が集うこの学校は有利である。子どもたちも「変わっているし、ときどきムカつくけど、まあいいか」と付き合い、互いに面倒をよくみている。異質なものを排除せず、折り合いをつけ仲良くやっていこうとする姿勢は、大いに称賛されてよい。そういう雰囲気の中で、2年間彼の担任だったH先生の粘り強い指導も、素晴らしかった。

普通なら注意が入る場面で、「温かく無視」してくれた。また、昨日の彼を今日の彼が少しでも超えられたことを喜んでくれ、彼も大切なクラスの一員だという一貫した態度、さらに、他の級友たちと常にA君とを結びつけ、良い関係となるように働きかけてくれた。どれも値千金の担任H先生による特別支援の姿だった。

担任王国の小学校では、先生の姿勢が子どもたちのモデルになる。そのH先生の態度を模範に、クラスみんなとA君との関係が温かさを持ってつながっていった。そうやって過ごした5、6年生の2年間、彼は普通の児童、目立たない普通のクラスメートになることができたのである。

卒業式で語った彼の言葉が、そのことを如実に物語っていたのだった。